

## 論 文

## 「砂場保育」に関する保育者研修プログラムに関する考察

—福島県で開催した保育者研修の実践例から—

笠 間 浩 幸

同志社女子大学・現代社会学部・現代こども学科・教授

A Review of Sandbox Play for Teachers  
in Young Children's Facilities

—A Practical Example of Childcare Training in Fukushima Prefecture—

KASAMA Hiroyuki

Department of Childhood Studies, Faculty of Contemporary Social Studies,  
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

## Abstract

The aims of this research are to improve and enrich the training curriculum for kindergarten and enable nursery school teachers to conduct effective childcare practices utilizing the sandbox. Although a sandbox is commonly included in playground equipment in most childcare facilities, many childcare practitioners do not fully understand how to optimize the potentiality of sandbox play. Generally, playing in a sandbox is considered to enhance various aspects of children's development, such as the imagination, creativity, and social skills. If sandbox play is effectively utilized, teachers can improve their practices and gain confidence. Thus, they will be providing greater benefits for children in their care, who will be enriched through the enjoyable play experiences.

For a long time, I have been providing training programs regarding sandbox play for teachers across Japan. When I began offering this training, I had very little understanding of the questions that they had about their teaching practices. As my interactions with teachers increased, I modified the contents and methods of the training program as I learned more about their work environments and needs. For further improvements in the program, I administered a survey questionnaire at a workshop held in August 2017 for childcare professionals in Fukushima Prefecture. Based on the findings of that survey, this paper includes the identification and analyses of current issues that childcare practitioners are facing in their sandbox activities. Consideration is being given to developing a program that will unify concrete practices with child development theories.

## 1. 問題の所在

日本では多くの保育施設（幼稚園・保育所・

認定こども園）が砂場を有している。これは、1926（大正15）年の「幼稚園令施行規則」が幼稚園の砂場設置を義務付けたことによる。

筆者は1989年以来、砂場研究に取り組んできた。それは日本を含む世界における砂場の歴史追究に始まり（笠間1993, 1998, 1999a, 1999b, 2001）、砂遊びのプログラム開発（笠間2007）、砂遊びの発達の意義の考察（笠間2012, 2014a）、砂場の環境整備（笠間2014b）、砂場の砂の適切化の解明（笠間2018）といった経緯を持つ。一方、これらの研究と平行して全国各地からの砂場で行う保育（以後、「砂場保育」と称する）に関する現職の保育者<sup>1)</sup>を対象とする研修の開催要請に応じてきた。その回数は年々増え続け、今後も続くものとする。この背景には、保育施設における砂場遊びはきわめて日常的な場面であるにもかかわらず、砂場の活用や指導法については意外にも不明な点が多いということがある。

小川（2018）は「知識や技術は養成機関を卒業し、幼稚園教諭や保育士、保育教諭になったから身に付くものではなく、日ごろの研修や研鑽の積み重ねによって身に付くものである」と述べるが、普段の保育に対する注意深い洞察と意識的な学びへの導きこそ、保育者研修が果たすべき重要な役割であるとする。そもそも砂場での遊びは子どもの多様な発達を引き出す大きな可能性を持つ（石井1990, 2007；柴田2005；柏・田中2007；粕谷2007；小川清実2007；箕輪2008；吉田2009；笠間2012；中村2012；小谷2013）。それゆえに、保育者が砂場及び砂場保育の意義や特性を理解し、具体的により創造的な保育実践の改良につながるような研修プログラムの構築は必須の課題となっている。

## 2. 研究の目的と方法

これまで筆者が行ってきた保育者研修を振り返るならば、大きく次のようにまとめることができる。

- 第Ⅰ期：砂場の歴史的な意義を伝える研修
- 第Ⅱ期：砂場遊びの様子（写真）をもとに子どもの発達と保育の課題を考える研修

- 第Ⅲ期：砂場遊びの様子（DVD映像）をもとに子どもの発達と保育の課題を考える研修

- 第Ⅳ期：第Ⅲ期の内容に実技ワークショップを加えた研修

第Ⅰ期は、主に砂場の歴史からたどる子ども観や遊び観の変遷を伝えた時期である。砂場は自明の保育環境ではあっても、歴史的に見直すことによってその存在理由や価値に気づくことの可能性を伝えた。一方この時期は、保育者もつ疑問や実践上の悩みについて筆者自身未だ十分に把握するには至っておらず、具体的な助言や提案にまでは至らなかった。

第Ⅱ期は、砂場の歴史的意義の部分縮小し、子どもの砂遊びの特徴的な様子と保育者としての課題を伝えた時期である。これは2004年より京都市内の保育所で開始した砂場遊びの継続観察と、そこで撮影した写真をもとにした内容であったが、具体的な子どもの姿を伝えることを通して、砂場保育に関する一定の理解を深めることができたとする。

第Ⅲ期は、第Ⅱ期の内容を、写真からDVD動画に切り替えてからの時期である。このDVDは、上記保育所観察を6年半、継続撮影した映像をもとに制作した「乳幼児の砂遊び」（新宿スタジオ2011）<sup>2)</sup>である。そこには当初0歳だった子どもたちが成長して保育所を満了するまでの様々な砂場遊びの様子、表情、言葉、手指や身体の動き、保育者との位置関係、さらに砂場環境、道具類、園庭全体の雰囲気等々の情報が盛り込まれている。映像によって情報量が格段に増えたことと、保育者の関心が大いに高まったことを実感した。

第Ⅳ期は、第Ⅲ期の内容に、子どもから大人まで、それぞれの能力に応じて取り組めるサンドアート実技を組み込むようになった時期である。この実技体験は、時間や砂場等の物理的条件によって必ずしも全ての研修会で実現できることではないが、可能な限り研修の主催者との調整を図りながら取り入れるようにした。なお実技体験も回数を重ねるなかで、その目的や内

容も次のように変化し、現在はIV-1からIV-3が混在している。

IV-1：保育者自らの楽しみ体験：直接砂に触れたり、同僚と一緒に砂遊びを体験したりすることを通して砂場遊びの可能性を感じてもらう。

IV-2：保育実践に即活用できるスキル獲得：サンドアートへの挑戦を通して砂場保育実践への意欲と見通しを持ってもらう。

IV-3：砂場遊びの意義や展開方法のイメージ化：砂場保育の具体的な指導計画の視点を持つ、環境整備の課題を考える。

吉田（2006）はCaffarellaの考えをもとに、「参加者が研修で学んだことが仕事で使われる際に影響を及ぼす要因」として、「研修プログラムの形態と進め方」及び「研修プログラムの内容」の2つの視点について次のように述べる。まず、「研修プログラムの形態と進め方」では次の5つのプロセスを踏むことが大切であるとする。つまり、①ひきつける（関心を喚起する段階）、②インパクトのある体験や情報の提供、③体験や情報の「振り返り」、④応用する（練習する段階）、⑤プログラム全体の振り返りと評価、である。次に、「研修プログラムの内容」では、①極めて実用的、②参加者がすでに持っている知識や経験に上乘せする形で研修を行うことが大切であるという。

吉田に学ぶならば、筆者の研修プログラムの形態と内容は第IV期において、ようやくこの「仕事で使われる」までの緒についたものと考ええる。なお、この「仕事で使われる」について筆者は、「明日の保育」で使われることと、もっと先の「これからの保育」で使われることとの二つの次元を想定する。「明日の保育」は文字通り明日から即活用が可能な内容とスキルを伝えることで、「学びの即効性」ととらえる。一方「これからの保育」というのは、砂場保育という特定の領域に関する学びが、やがて保育全般の見直しや改善、さらには指導者としての自

分自身も変わっていくという比較的長期にわたる学びの影響力を発揮するもので、これを「学びの永続性」と位置付ける。ただしこのことを「べき論」的に抽象的、一方的に語って終わるのではなく、保育者自身が課題に気づき、日々実践の中でも思い出され、保育の改善につながるような研修にしていくことこそが理想と考える。

このような問題意識から、本研究では第IV期にあたる保育者研修に焦点を当て、筆者が目指すような研修を実現していくための課題解明を目的とする。考察の対象となる保育者研修は2017年8月1日、福島市内の小学校において県内の現職保育者135名に行ったものである。内容は大きく、①砂場保育について話し合うグループワーク、②砂場ワークショップ（①と②は参加者全体を二組に分けての交代制とした）、③DVD視聴と講話である。そして最後に記名での感想用紙（回収103部、未回収32）と無記名の感想用紙（回収134部、未回収1部）を配布し、研修に関する感想を尋ねた。

ところで砂場保育に特化した保育者研修というものは、これまで他に例はなく研究の蓄積もない。そこで本稿では、前提となる砂場保育に関する研修とはどのようなものであったのかを明らかにするために、まずプログラムの全般を概括する。その上で、上記「感想用紙」の記述から研修の効果や課題を読み解いていきたい。なお、本研修会における感想用紙の様式は、記名式が特に質問項目を設けずに全体的な感想を求めたのに対して、無記名のものが研修プログラムの項目に沿った質問事項を設けたもので、より具体的な保育者の思いを読み取ることができることから、これを考察の対象とする。

### 3. 研修プログラムの概要

#### 3.1 研修プログラムの全体

当日の流れは表1に示した通りである。午前の部は、最初に全体ガイダンスを行った後、参加者を二つのグループに分け、「屋内グループワーク」と「砂場ワークショップ」をそれぞれ

表 1 砂場保育に関する保育者研修プログラム

<p>【午前の部：10:15-12:00】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>ガイダンス（研修全体の予定確認）</li> <li>屋内グループワークと砂場ワークショップ（参加者を二組に分けての交代制）       <ol style="list-style-type: none"> <li>①屋内グループワーク：5名1グループでの課題についての話し合い           <ul style="list-style-type: none"> <li>課題1：子どもへの保育者対応のあり方についての話し合い（図1参照）</li> <li>課題2：砂場保育について感じている疑問や悩みの出し合いとまとめ</li> </ul> </li> <li>②砂場ワークショップ：砂場遊びの新たな展開を目指す実技体験           <ul style="list-style-type: none"> <li>・「適切な砂」の感触の実体験</li> <li>・新しい道具・身近な道具、それぞれの使い方と工夫</li> <li>・砂場における子どもの姿と展開イメージ</li> </ul> </li> </ol> </li> </ol> <p>【午後の部：13:00-15:00】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>砂場保育に関するレクチャー       <ol style="list-style-type: none"> <li>①DVD「乳幼児期の砂遊び」の視聴（映像に沿って簡単なコメントを入れる）</li> <li>②「砂遊びから見る子どもの発達と保育の課題」講話           <ul style="list-style-type: none"> <li>・砂遊びの長期系統的視点</li> <li>・子どもの砂遊びを見つめる構造的視点</li> <li>・砂場保育における保育者の役割</li> </ul> </li> <li>③砂場保育への疑問に答える           <ul style="list-style-type: none"> <li>・各グループからの疑問紹介と問題の系統分け</li> <li>・疑問への回答</li> </ul> </li> </ol> </li> <li>振り返り       <ul style="list-style-type: none"> <li>◎感想の記入：記名、無記名の2種類の感想用紙への記入と提出</li> <li>◎終了の挨拶（主催者）</li> </ul> </li> </ol>
--

れ40分ずつの交代制として全員が両方を体験した。午後の部は、①DVD視聴、②講話、③疑問への回答という、大きく3つのセッションからなるレクチャーと振り返り（感想の記入）で構成した。

### 3.2 屋内グループワーク

屋内グループワークでは、大きく二つの課題を提示した。

まず一つ目は、砂場でよく見られる子どもの

姿に対する保育者対応を問うものである。これは参加者全員に図1を提示し、次のような課題説明を行った。

#### 「課題1」

「砂場では多様な子どもの姿が見られる。あなたは保育者として、A児・B児をどのようにとらえ、どのような関わりをすると考えますか。それぞれについて所定の色の付箋に考えを記した後、各グループで話し合ってください」

AさんとBさん（いずれも5歳児、10月のある日）	
○Aさん 砂場の縁に座って、ただ、他の子のする砂遊びを眺めている。	青色の付箋
○Bさん お鍋に砂を入れたり、カップで砂型を皿の上につくったり、それを友だちにどうぞとすすめたりしている。	緑色の付箋
保育者としてのあなたは、Aさん、Bさんにどのように関わりますか。あなたなりの思いや考えを簡単にまとめて各々の付箋に書いてください。	

図 1 屋内グループワークの課題

この課題は次のような趣旨に基づくものであった。ただし、この趣旨説明は保育者の自由な発想を妨げないように午後のレクチャーのなかで行った。

- ・子どもの遊びは、活発な活動だけではなく、静かなふるまいの中でも展開されることがある。特に砂場はそのような多様な子どもの姿、遊びの形態を可能にする遊び場である。
- ・子どもの遊びのとりえ方は、たとえ同じ場面を見ても人によって違いがある。A児、B児に対してもいろいろな考えが出てくると思われるが、その違いにはどのような遊びのとりえ方、子どものとりえ方が背景にあると考えられるか。

### 「課題2」

砂場保育に関する疑問、悩み等を付箋に書き出してグループ内で話し合いを持ち、さらに午後のレクチャーで特に触れてほしいテーマを絞り込む。

### 3.3 砂場ワークショップ

砂場ワークショップは、会場となった小学校の砂場スペースに、砂場に適した5立米の砂（「適切な砂」とする）を搬入して行った。その中央部分には、参加者の動機づけを図るために、高さ1.3mほどの砂像を事前に筆者が制作し、展示しておいた。

「適切な砂」とは、福島県南部に位置する棚倉町産出の砂で、JIS規格による「砂（0.075mm～2.0mm）」の含有率が96.1%のものである。本来砂場とは「砂の場」であるべきだが、日本の多くの保育施設の砂場がシルトや粘土、礫など砂以外の粒子が混入していることから、いわば「土場」「泥場」もしくは「礫場」と化している。砂場が本来の砂場でない場合、表面が固くなって幼児が自分の手指で砂を掘ることができない、造形遊びがしにくい、保育者には常に砂場の砂を掘り起こす作業負担が生じる、幼児の手足が泥だらけになって後始末に労力がかかる等の問題が生じる。だが、「適切な砂」

はこれらの問題を大幅に改善する。「適切な砂」による砂場の設置は、砂場の最も基本的な要素である「砂」からの砂場環境改善の課題を保育者に感じてもらうことを目的としたものである。

砂場ワークショップでは、「適切な砂」以外に、砂場ではこれまで馴染みのなかった特別な道具を用意し、その使い方を伝えた。また、その逆にごく一般的な砂場道具の意外な使い方の工夫にも触れながら、基本的なサンドアート・スキルを伝授した。それぞれ次のようなものである。

#### ◎新しい道具類

##### a) 木鏝

左官道具である木製の鏝を用いて、その使い方を5段階で紹介する。

- i) 砂表面を均して肌理を整える（木鏝の一般的な使い方を経験するが、この前にまず掌で同じ作業をし、道具と手の違いを実感してもらう）
- ii) 剣先部分で穴を掘る（スコップと同じ使い方をする）
- iii) 砂をかき寄せて小さな砂山をつくる（「砂のブルドーザー」と伝える）
- iv) 砂山を上から4方向に肌理を整えながら下方に滑らして、ピラミッドをつくる
- v) ピラミッドの4面に、上から階段をつくっていく

##### b) 穴あきバケツ（呼称）

底を抜いた植木鉢（ケンガイ鉢4号から15号までの大きさのもの）を用いての砂型の高積みの遊びを紹介する。穴あきバケツの積み方によっては、数段重ねの型抜きが可能となる。

#### ◎簡単なサンドアート制作方法の提示

##### a) 道具を使ってつくる砂の城

穴あきバケツと木鏝を使い、3分程度で子どもが注目するような砂の城や階段、城壁をつくる技を紹介する。その後、園に普通にある道具類を木鏝の代わりに使う工夫も紹介する。例えば、普通の小さなバケツやスコップ、牛乳パックなどでも階段ができ

ることを示す。これは自園に特別な道具がなくても工夫次第で遊びが展開できることを伝えるためである。

- b) 道具を全く使わずに、手だけでできるサンドアートとして、アニメキャラクターと地を這うワニの作り方を紹介する。

以上が砂場ワークショップでのガイダンス内容で、時間はおよそ20分を要した。その後は参加者が自由にサンドアートに挑戦し、筆者が適宜助言を行った。

この砂場ワークショップは、次のような保育者の学びと変容を期待するものである。

- ①保育者も砂場遊びの楽しさを実感し、子どもの思いや行動への共感をもつことができるようになる
- ②「適切な砂」に触れることを通して、自園の砂場環境やその整備への視点を持つ
- ③新しい道具及びこれまでの道具の使い方の工夫と、新たな砂遊びの展開方法を知る
- ④子どもの発達や保育課題の理論的な理解につながるような砂場遊びの具体的なイメージを持つ
- ⑤砂場遊びの指導法は、他の保育活動に対しても応用の可能性があることを感じる

### 3.4 午後の部のレクチャー

午後の部の最初のセッションは、約40分間のDVD映像の視聴で、内容と構成は次のようなものである。

- ①砂場の歴史：日本の砂場に影響を与えたアメリカのプレイグラウンド・ムーブメントと砂場の関係
- ②砂との出会い：0-1歳児期の子どもの初めての砂遊びの様子や、様々な感覚的な砂遊びの様子
- ③砂で遊ばない砂遊び：1歳児期の特徴である「物」の操作を通しての砂遊びの様子
- ④砂で遊ぶ砂遊び：主に2歳児期以降の砂への直接的な関わりや状態変化をつく

り出す砂遊びの様子

- ⑤イメージと言葉を広げる砂遊び：主に3歳児期以降の砂場でのごっこ遊びや連合遊びの様子
- ⑥多様な素材が広げる砂遊び：砂場遊びの新たな工夫として、砂場ではあまり一般的ではない物の効果的な使い方を紹介。さらに木鏝と穴あきバケツの導入による砂場保育の変化の様子
- ⑦遊び空間としての砂場：砂場及び砂場周辺の環境整備や工夫による砂遊びの展開と変化の様子
- ⑧イメージを共有する協同的砂遊び：年長児最後の砂遊びで物語「エルマーのぼうけん」を砂場に創り出した協同的遊び。砂場におけるアートの可能性を紹介

以上がDVDの内容と構成であるが、視聴は適宜筆者がコメントを加えながら行う。特に子どもや保育者の注目すべき言動等の場面では映像をストップさせて質問をしたり、詳しい解説を加えたりする。

次のセッションは、資料やスライドを用いた講話の時間となる。主要なテーマは、砂場遊びの系統的把握及び構造的把握を説明することで、これは表2・図2を用いて行うものである。それぞれ次のような内容と意図を持つ。

- ◎砂場遊びの系統的把握…砂場遊びは子どもの年齢や発達に即して展開され、変化する。決してその場限りのやみくもで無意味な行為ではない。よって子どもの砂遊びを一緒に「砂場遊び」ととらえるのではなく、それぞれの発達課題に応じた大きな遊びの展開として把握すべきである。そこから保育者としての対応の仕方や環境整備の課題等、見通しを持った援助が可能となる。また、教育課程における砂場遊びの計画的な位置付けが可能となる。
- ◎構造的把握…砂場遊びでは様々な子どもの力が引き出される。その力を分析的に見るのが構造的把握である。具体的には

表 2 砂遊びの発達の局面の展開

	フェイズ 1	フェイズ 2	フェイズ 3
特徴	感覚的な出会いとしての砂遊び	砂で遊ばない砂遊び (砂に間接的に関わる砂遊び)	砂で遊ぶ砂遊び (砂に直接関わる砂遊び)
子どもの 行為	見る、触れる、座る、歩く、登る…	物を持つ、すくう、入れる、砂型をつくる…	掘る、かき寄せる、山をつくる、水と混ぜる、泥だんごをつくる…
発達の 視点	・感覚（特に視覚・触覚） ・深部感覚（筋肉、関節、バランス）	・手指の巧緻性 ・手首、腕の回転、姿勢の維持 ・物の道具としての扱い（文化の獲得）	・微妙な操作性の向上 ・手指の力、腕力増大、触覚の鋭敏化 ・認知、科学的な態度と思考
	フェイズ 4		フェイズ 5
特徴	イメージと言葉が広げる砂遊び		アートとしての砂遊び
子どもの 行為	砂を何かに見立てる、見立てを通して友達とやりとりをする ごっこ遊び、役割分担 砂場全体にイメージを広げていく…		砂を固める、彫る、刻む、模様や形をつくる 自分のイメージに沿い、仲間とイメージを共有しながらの制作 制作物を評価し、活動を振り返る
発達の 視点	・想像力、創造性 ・言葉 ・協同、社会性、コミュニケーション		・目的の意識化 ・表現 ・美意識 ・共感

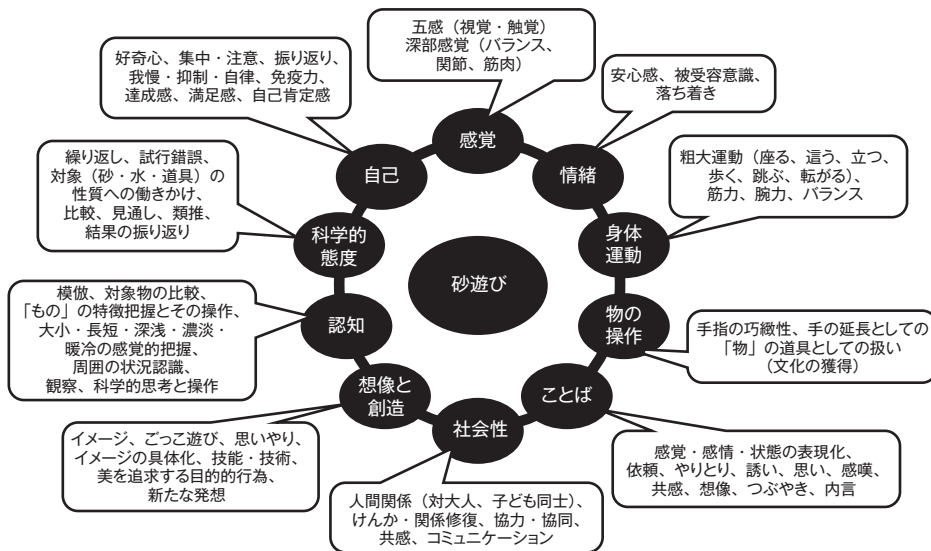


図 2 砂遊びに潜む子どもの発達の要素

10の視点にわたる能力をあげている。これらは子どもの砂場遊びの一瞬一瞬において見出すことが可能であり、やはり単純に「砂場遊び」と一くくりにとらえると見逃しがちとなることから、注意深い観察の指標として提示するものである。

一方、砂場遊びはこれらの能力の獲得を目指して訓練的に行うことではないことも強調する。つまり、砂場遊びは決して何かの目的のために強制されるべきものではなく、遊びそのものが目的になるということである。

◎保育者としての課題と視点…砂場遊びの意義や展開に見通しがもてないまましていると、砂場保育はせっかくの発展可能性を失うか、子どもは飽きを感じて砂場から離れていく。また、子どもの成長を具体的・客観的にとらえることも、保護者に対して砂遊びの意味を語ることも難しい。だが、砂場遊びの大きな見通しや子どもの発達の支援につながる視点を持つことができれば、眼前で起きていることの理解や子どもにとっての最善の関わりも可能となっていく。これこそ専門職としての保育者の目であり、役割である。

なお、表1・図1の観点は現時点における一つの仮説であり、保育者は当面これを参考にしつつも、常にその加筆修正を自分で行っていけるような観察と評価を続けてもらいたい。さらに、もう一つ大切なこととして、このような砂場保育のとらえ方と視点は、他のすべての保育活動にも応用・適用ができるものである。砂場保育に関する学びの普遍性を是非感じてもらいたい。

これが、講話の主な内容となるが、これらも可能な限り、DVDの映像場面や午前中の砂場ワークショップでの場面をたどりながら、具体的に伝えていくことを心掛けている。

最後のセッションは、午前中の屋内グループワークで各班がまとめた「砂場保育について感じている疑問や悩み」に関するコメントと質疑応答の時間となる。その後二つの感想用紙への記入をもってすべての研修プログラムを終了する。

#### 4. 結果及び考察

ここからは本研修に対する無記名の感想用紙（回収数134、未回収1）への記述をもとに、研修への評価と改善の課題について考察する。感想用紙には次のように本研修プログラムの内容に沿って記入を求めた。

- ①本研修への参加の理由、期待すること
- ②午前中のグループワークについて

③午前中の砂場ワークショップについて

④午後のレクチャー（DVD／講話）について

⑤全体の振り返りについて

なお、①を除いた他の項目には、「大変よかった、よかった、ふつう」の3段階評価を求めた。また、同一の保育者がそれぞれの質問項目において複数の観点に対して言及しているものもあり、その場合は観点ごとの言及をカウントして「延べ回答数」として数値を示す（②を除く）。さらに回答数はかなりの数に上るため特徴的なものを抽出するが文章はほぼ記述されたままを表中に列挙する。ただし同様の意見が多数のときは、筆者が要約してまとめている。これらのことを前提に、それぞれの項目について見ていきたい。

##### 4.1 研修への参加理由、研修に期待すること

これまで、研修時において砂場保育に関する疑問や問題と感じていることを尋ねることはあったが、今回初めて研修参加への理由及び研修に期待することについて問うた。その結果を大きく次のように分類した。

- ①砂場遊びの指導力の向上
- ②砂場保育に関する研修そのものへの興味
- ③砂場遊びについての理解
- ④保育全般への力量向上
- ⑤保育を通じた子どもたちへの還元

それぞれに対する具体的な記述は表3のとおりである。

①についての回答は「疑問や悩み」を尋ねたときの回答と重なるものが多い。やはり多くの保育者が砂場保育に関する疑問や悩みを感じており、その中でも半数以上が砂場遊びの「ワンパターン、マンネリ、バリエーションのなさ、展開に悩む、停滞」といった言葉で表されるような問題ととらえている。そのことを、砂場遊びの必然なこととしてではなく、自分の指導力不足と考えたとき、保育者は学びを必要とする。そこではまさに「明日の保育」（学びの即効性）に直結する内容が求められる。



②からは、極めて日常的な保育活動であっても、十分な知識や技能がやはり浸透していないということが分かる。一般にあまりに「当たり前」過ぎることに対しては、たとえ釈然としない問題や悩みを感じていても、あえて積極的に問うほどのことではないという意識が働きがちとなる。砂場保育はまさにこのことにあたる。「どこにでもある砂場に関してのちゃんとした研修を受けたことがなかった」という記述もあるように、保育指導法に関するテキストでは砂場の重要性は書かれていても、実践現場での更なる必要に応える具体的な記述はほとんど見当たらない。研修に至っては皆無である。理論と実技を両輪とする本研修の存在は、保育者の関心を大いに引き寄せたものとする。

③と④は、疑問や悩みからの発展的な問題意識ととらえられる。子どもたちの砂遊びをどう広げることができるかといった眼前の差し迫った問題が、そもそも砂遊びとは何かといった本質に迫る問題へと発展し、砂場保育にとどまらない保育全般についての力量アップへの期待へとつながっている。これこそ「これからの保育」(学びの永続性)への姿勢ととらえるが、筆者

が本研修の目的としていたことが、すでに研修前の参加者から期待されていたということがわかった。

⑤は、今回の研修で身に付けたものを是非子どもたちに持ち帰りたいという回答である。これは保育者ならではの使命感であり、また充実感につながるものとする。ただし、持ち帰りがそのまま子どもへの「注入」とならないよう注意したい。本研修で獲得される知識とスキルによる効果は、最終的には子どもたちに届くことが目的ではあるが、まずは保育者自身が余裕を持って砂場保育に取り組めるようにすることが前提である。余裕を持つというのは、保育者主導の活動ではなく、子どもを見守り、子どもからの行動を待ち、そして適切な環境を整えるといった間接的指導ができることと定義したい。

これらの回答は、「疑問や悩み」への問いからだけではあまり見えてこなかったものであり、保育者としての専門性を追求しようとする高い意識の表れととらえられる。またここまでの思いを保育者に抱かせるという点で、砂場保育がもつ可能性の表れとして受け止めたい。

表3 砂場研修への参加の理由、期待すること(未記入者3人、延べ回答数166件)

①砂場遊びの指導力の向上(50)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂遊びの広げ方、発展のさせ方、技術などを学びたい。</li> <li>・砂遊びの活動のマンネリ化、ワンパターン化しているので変えたい。</li> <li>・砂場遊びについて自分自身バリエーションがなかったので面白い遊び方を教えてもらえるかなという期待。</li> <li>・遊ばせ方のアイデアが乏しく、子どもの遊びも停滞し、盛り上がりにかけていると思っていたため遊びの工夫やヒントを学びたい。</li> <li>・どんな道具や技法があるのかを知りたい。</li> </ul>
②砂場保育に関する研修そのものへの興味(32)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どこにでもある砂場に関してのちゃんとした研修を受けたことがなかった。</li> <li>・どのような研修なのか興味があった。</li> <li>・砂場での実技、実体験があり、すぐに実践できるかなと感じたため。</li> <li>・もっと盛り上げられたらいいな、新しい遊び方はないかなと感じていた。</li> <li>・是非学びたい、興味を持った。</li> </ul>
③砂場遊びについての理解(26)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂遊びの必要性、どんな育ちが見られるのか。</li> <li>・砂場から見えてくる子供の姿、発達が分からず、自分のかかわり方に疑問を抱いていた。</li> <li>・砂遊びについて、知っているようで知らないと思ったためとどんな発展ができるのかを知りたい。</li> <li>・本質や展開、人や物的環境のあり方を学びたい。</li> <li>・他の園の実践を知りたい。</li> </ul>

④保育全般への力量向上 (23)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の保育技術、能力の向上、保育の引き出しを増やしたい。</li> <li>・日々（日頃）の実践に生かしていきたい。</li> <li>・自分を振り返ったり、新しい気づきを得たりできる学びに期待する。</li> <li>・保育の中で砂遊びをどう生かすことができるか知りたい。</li> <li>・保育者としての質の向上、スキルアップ、専門知識を深めたい。</li> </ul>
⑤保育を通じた子どもたちへの還元 (19)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学んだことを園に持ち帰り子どもたちに伝えていきたい。</li> <li>・子どもたちの成長に合わせた援助・内容を学びたかった。</li> <li>・砂遊びの魅力を子どもたちに伝えられるようになりたい。</li> <li>・子どもの遊びをより楽しく充実したものにするため。</li> <li>・子どもたちの目が輝くような新しい遊び方を提案したい</li> </ul>
⑥その他 (16)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園長や主任保育士等からの参加の指示による。</li> <li>・自分自身砂遊びに苦手意識があり、好きに変えたいと思った。</li> <li>・自分自身、砂遊びの経験が少なく、震災もあって先輩の砂場保育をみる機会が少なかったため、まず自分自身が楽しみたい。</li> <li>・子どもたちは砂遊びの経験がなく、積極的に取り入れたい。</li> <li>・他の園の先生との交流を期待。</li> </ul>

## 4.2 屋内グループワークについて

屋内グループワークは、「課題1：子どもへの保育者対応のあり方についての話し合い」、「課題2：砂場保育について感じている疑問や悩みのお出し合いとまとめ」という二つの課題があった。これらの課題については、模造紙上に各自が意見を書いた付箋を貼りだし、同じような意見をグループ化してまとめた。

この課題への質問では、3段階の評価を求めたところ、次のような結果となった。

A. 大変よかった……78人

B. よかった………53人

C. ふつう………2人 \*未記入1人

具体的な内容については表4のように大きく4つに分類した。

屋内グループワークでは様々な意見が出されたことがよくわかる。特徴的なところでは、課題1のA児に対しては、直接的な対応を図ろうとする回答が多い中で、子どもをよく観察し、理解することの重要性についても語られていた。B児については、遊びの積極性を肯定的に受け止め、さらなる展開を図るために、人的環境（保育者や子ども同士の関わりからの側面）、物的環境（道具・砂場周辺の自然素材や什器等）を整えていくといった、多面的な視点が出されている。これらの回答からは、本課題を提起した筆者の趣旨が参加者にも十分響いたものと考えられる。

課題2の砂場保育に関する悩みや疑問に関しては、直接的な子どもへの関わり方、年齢に応じた砂遊びの展開の仕方、保育者自身の砂場遊びのとらえ方、そして環境整備に関する問題等が挙げられた。これらの問題はこれまでの研修においても同様に示されてきた疑問点であったが、ここでもまたそのことが確認できた。

屋内グループワークを通じて、多様な子ども観、遊び観への気づき、砂場遊びに対する保育者の視点の変化、疑問や悩みの共有が図られたものと評価する。また他の保育者が同様の悩みを持っていることに対する安ど感や、他園の保育者からアドバイスを受けたことへの喜びの声も、少人数によるディスカッションならではの効果であったと考える。

グループワークの方法に関する意見も貴重である。まず、グループ設定の方法であるが、担当する子どもの年齢や保育者としての経験年数、幼稚園と保育所、認定こども園といった施設の違い、公立や私立といった設置者別等その組み合わせや構成は今後、課題に応じて配慮が必要であると感じた。また「特に発表を意識することなく話すことができたことがよかった」という声は、リラックスした雰囲気の大切さを物語るものと思われる。研修の実施において当然ながらも大事なところである。

表4 屋内グループワークについての感想（未記入者0人）

① A 児・B 児への考え方に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の先生方の A さんと B さんの砂遊びのかかわり方を知って、勉強になりました。葉っぱや石などで子どもの遊びの幅が広がるようにしたり、直接的には関わらず、他の子を通じての間接的な援助をしたり、工夫して保育をしていきたいと思いました。</li> <li>・私のグループでは考えることはほぼ一緒でしたが、その中で、援助の手立てや言葉かけ、見守りなどの内容がいろいろな意見が出たことでとても参考になりました。園内研修などなかなか取り組めない中でこのような機会は貴重な時間となりました。園内でも少し取り入れたいと思いました。</li> <li>・意見をやり取りする中で、同じ場面の子に対し、自分とは違うアプローチの方法など考えることができた。</li> <li>・事例の読み取りや対応の仕方の違いが開けて良かった。</li> <li>・ただ砂場を見ている子ども＝安ど感もあることを学んだ。</li> </ul>
② 砂場遊びのとらえ方について	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どの先生も砂遊びに対する疑問は共通するなど感じた。</li> <li>・同じ悩みを持っていることが分かって安心した。</li> <li>・他の園の先生方と一緒に進めることで考え方や課題点と通ずる点があり、共通理解を図ったり、悩み事を皆で話し合える良い機会となった。普段、そこまで砂場遊びを重視していなかったことに気づき、反省するとともに「砂場遊び」を探る機会となりよかった。</li> <li>・砂遊びひとつでこんなにも意見交換ができ学びにつながる。砂遊びで培われる人との関わり、達成感を感じる経験、試し、失敗から学ぶ経験といろいろあること、また砂遊びの可能性を大いに感じた。</li> </ul>
③ 悩みや意見交換・ディスカッションの機会に関して	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の園の砂遊びの様子や環境構成などを聞くことができた。悩みに対するアドバイスもいただけてよかった。自分と同じ意見の先生や、違う意見を聞くことができて勉強になった。</li> <li>・幼稚園だけでなく、保育所の先生方等、日々保育に携わる保育者の方々と子どもの関わり方や砂場あそびの様子、取り組んでいることを共有でき、とても参考になりました。悩みを共有できたことも、皆さん同じ悩みがあるんだと感じることができ、良かったなと思いました。</li> <li>・5人グループ全員初対面だったが、お互いの園について「0歳児は…だよね」、「0歳は大変だよね」など同じ職業を通しての悩みなど話せてよかった。ベテランの先生方と同じ問題について意見を出し合うことができて人間関係でもとても学べた。</li> </ul>
④ グループワークの方法に関する意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の園の先生方と意見を交わす良い機会となりましたが、担任する子どもの年齢が合わず、話し合いで疑問点等相談できずにいるところもあった。</li> <li>・例えば座る席を決めてしまい保育園や他市の人と話し合うことで、意見交換、共有、実態把握など参考にできることもあったり、視野を広げたりすることもできるのではないかと思う。保育園参加者1名いらしたので、幼稚園とは異なる環境等が開けたのは良かった。</li> <li>・発表というプレッシャーがなかったので、普段の保育（砂遊びについて）の悩み等をありのまま相談し合えました。とても有効な時間配分でありがたかったです。</li> </ul>

#### 4.3 午前中の砂場ワークショップについて

この質問でも3段階の評価を求めたが、結果は次のようになった。

- A. 大変よかった……………120人  
 B. よかった…………… 12人  
 C. ふつう…………… 0人

\*未記入 2人

3段階評価では参加者の大多数が「大変よかった」を選んでいる。実技の内容と構成は十分な納得を得たものとする。

記述回答は、表5のように「その他」も含めて大きく5つに分類した。

まず、①道具に関する言及が最も多かったことはやや意外であった。なぜなら、サンドアートへの挑戦による砂場遊びの楽しさを最も大き

く感じてもらえるのではないかと考えていたからである。だが、サンドアートの面白さの実現というのは、何よりもこれまで目にしたことのない道具類によるものであることを考えれば、これはやはり当然の結果であると考え。また、既存の道具類も様々な活用ができることへの気づきは、単なる物の扱いに関する発見だけでなく、自らの固定観念からの脱却を図ろうとする意識にもつながっていったこととして興味深い。早速購入や自分でも道具を作りたいという声は印象的である。

②は、まさに砂場ワークショップの大きな目的とするところである。砂場遊びの面白さと可能性を驚きをもって伝えることができたものとする。本ワークショップで興味深いことは、

サンドアートでは技術的な優劣をほとんど感じることなく、それぞれに達成感を与えてくれることである。そもそも砂が固まる、それを切り刻むことができる、そして自分のイメージを創り出すことができるという大きな意外性が、作品としての出来・不出来以上の面白さにつながっていくものと考えている。その体験は、人にも伝えたい、子どもたちにも早く見せてあげたい、という思いにつながっていくようだ。

③からは、保育者が自分の楽しさを通じて、子どもの思いや気持ちを推し量っていることがわかる。また、単に子どもにやって見せて喜ばせようというのではなく、自分も子どもの心に一度入って子どもの思いを表現しているところが、保育者ならではの感想であると感じた。また筆者は、スキルの説明とともに子どもの遊びの特徴も伝えたが、そのことを保育者はしっかり受け止めているようであり、このことは今後も続けたい。

④に見る「適切な砂」の感触の良さは、自園の環境を考える意識を大いに高めることにつながった。砂質とともに砂の量への気づきも大切な発見である。

⑤のその他では、もっと時間が欲しかったという回答が15を占めた。他には、砂場における人間関係の楽しさ、砂場遊びが年齢を問わず楽しさを味わえるものであることなど新たな気

づきである。筆者の手際の良さへの驚きも書かれているが、このような技も保育者としては是非必要なものと考えている。子どもの関心を瞬時にとらえて意欲を引き出すことにつながる技であると考えている。

以上から、保育者が感覚的な面白さを体験し、道具への新たな興味を持ち、具体的なスキルを獲得し、人との楽しさの共有をすることが、自ずとその思いを他者（子どもや園の同僚）に伝えたいと思うようになっていくプロセスが見えるようである。

砂場保育に関する実技研修では、今後もほぼこの内容を踏襲していきたいと考えるが、単なるスキルの伝授に終わらず、子どもの姿も併せて伝えることが望ましいことがわかった。さらに保育者の経験や悩み等をここでも引き出しながら、そのことに基づく具体的な改善点を示していくことが、より効果的な実技ワークショップになると考える。また可能な限り、余裕のある時間の確保も大きな条件となる。

ところで、砂場ワークショップについては、3.3において5項目からなる「保育者の学びと変容」を記したが、本研修を通してほぼその課題は達成されたものと考えているが、その詳細に関する分析とワークショップ・プログラムの改善の課題はまた今後検討したい。

表5 砂場ワークショップについての感想（未記入者0人、延べ回答数205件）

①道具や物に関する感想（72）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・材料が1つ加わることで遊びが広がったり展開されていくこと、保育者も様々なそして柔軟な発想力を持ち子どもと一緒に遊びを楽しむことを改めて学んだ。普段の内容に何も感じていなかったが実習を受けたことで準備したいものが増えたとし、早く子どもたちと砂遊びをしたいと思った。</li> <li>・「こて」を使ったのは初めてだったが、いろいろな使い方があり、子供にかえった気持ちで楽しく遊ぶことができた。自園に帰ってからも研修報告として道具を用意し、楽しさや次々と形が変わる面白さなどを先生方全員で思い切り遊んでみたい。ぜひまたワークショップに参加したいです。</li> <li>・今まで使用したことのない道具（美顔ローラー、植木鉢、スプーン、コテなど）で遊ぶ面白さ、表現の広がりを発見できた。</li> <li>・普段ある道具でも使い方を覚えると面白いことができるのだと知った。子どもたちと一緒に試したいと思った。</li> <li>・道具や玩具等を、「こうするもの」「これしかできないもの」という先入観のように考えていたことに気が付いた。見方を変えてもう一度園にあるものを見直してみたい。</li> </ul>
-----------------	--

②楽しさへの気づき、技術や保育指導に関する感想 (51)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂でこんなことができるの!? こんな表現ができるんだ! という驚きや喜びを感じた。実際に自分でも作ってみることができて楽しかった。</li> <li>・ちょっとした工夫であんな素敵なお城や型抜きができるなんて知らなかった。子供たちに見せて、一緒にやってみたくと思った。</li> <li>・身近な道具で様々な遊び方ができることがわかり、早く2学期から子どもたちと一緒に遊びたくなった。階段の作り方をもっと練習して上手になりたいと思う。</li> <li>・先生が遊び方を知らない子どもたちには伝えられないので今回参加してよかった。砂遊びってこんなに面白いんだ、こんなにすごいものが作れるんだと感動した。</li> <li>・今まで砂場遊びの用具の使い方、援助の仕方について悩んだり、わからなかったりすることが多く、子どもたちの遊びも盛り上がり欠けるところがありました。…遊びの幅が広がり、子どもと一緒に教師も楽しみながら豊かな経験ができると感じました。</li> </ul>
③子どもとのかかわり方や子どもへの思いに関する感想 (35)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「立体的な砂遊び!」の体験が本当に楽しく、子どもの気持ちがちよっとわかった気がしました。</li> <li>・子どもの視点を教えていただけて、新しい発見でした。</li> <li>・砂場での遊びに使う道具も「砂場用」でなくても使って遊び楽しめること、人の言葉かけによって、子どもも創造力を広げる(気づくことができる)ことがわかった。</li> <li>・子どもたちが「やってみよう」と思えるような砂遊びをしたいと考えた。</li> <li>・子どもたちと一緒に想像をふくらませながら活動すると、より楽しく遊べるのではないかと思った。</li> </ul>
④砂への驚きと砂場環境への関心 (24)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂がふかふかでとてもびっくりした。子どもたちにもこんな環境の中で遊ばせてあげたいと思った。</li> <li>・まず自分の園で使用している砂との違いを知ることができてよかった。今までのものは「砂」でなかったことに驚きました。</li> <li>・直接、砂に触り、砂にも種類があることに気づいた。また砂の量にも驚きました。ある程度ないと製作にならないし大きな遊びへとつながっていかないのだなと思った。</li> <li>・砂場の概念(?) イメージが180度変わりました。現在、園で使用している砂は整形しづらく、扱いづらい為、遊びが広がりにくいです。初めてこんなに心地よくまた、遊びが広がる性質を持った砂で遊びました。貴重な体験でした。</li> </ul>
⑤その他 (23)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実技の時間がもっと欲しかった。</li> <li>・初めて会う先生方とも協力して楽しかったです。</li> <li>・大人でも思い切り楽しむことができました。</li> <li>・水を使うことでどう展開できるかななどもっと知りたかった。</li> <li>・先生の手早さに驚きました。少しの時間でお城や階段など次々にできて魔法のようでした。</li> </ul>

#### 4.4 午後のレクチャー(DVD／講話)について

同じく3段階の評価と自由記述を求めたところ次のような結果を得た。

- A. 大変よかった……105人  
 B. よかった…… 26人  
 C. ふつう…… 0人

\*未記入 3人

砂場ワークショップに比べるとやや「大変よかった」が減ったが、これもおおむね満足の結果として受け止める。

記述回答は、表6のように大きく5つに分類した。

①からは、何よりも視覚的な伝達には圧倒的なインパクトがあることがわかる。普段の保育では意外にも子どもの砂場遊びが注意深く見守られていることはそう多くはない。砂場はそれなりに安心・安全な場であることから、保育者の目はつい、他の注意を要する子どもや場面に転じがちである。保育中の「見えない部分、見落としがち場面」をDVDはよく伝えている。

②からは、乳児期から幼児期前半・後半へと、長期間にわたる子どもの成長に応じた砂場遊びの変化を伝えたことの効果を読み取ることができる。134枚の感想用紙には140もの「発達・

発達課題・年齢に応じた・成長・遊びの段階」等の言葉が記されていた。砂場遊びの系統的展開への印象は大きかったと思われる。また、それぞれの段階における保育の課題を、映像場面の保育者の姿と併せて伝えたことが、自らの保育指導と重ねながら考えることにつながったようだ。

③及び④の回答からは、これらの学びが保育スキルとしての改善のみならず、保育全般としての子どものとらえ方やそもそもどのような保育を目指すのかといった問題関心につながっていることに注目したい。映像では同じ砂場でも周辺環境を少し工夫することで様々な砂場遊びの展開が可能となることを示したが、そこからの自園の環境改善の意欲を引き出したことも研修の成果と考える。

午前中の実技スキルの獲得とともに砂場保育に関する理論的理解は、本研修の車の両輪である。保育指導において、子どもへの具体的な遊びのスキルの伝授は重要であるが、その前提として「なぜ」それを行うのかを考えることは必須の要件となる。ただやらせればよい、教えればよいというのは目的を持った保育行為ではない。そして、この「なぜ」を考える上では、砂場遊びの系統性と構造的理解は欠くことのできない視点であり、それをベースとして見通しのある保育行為が可能になるものと考え。また、このことがあるからこそ、たとえ砂場保育とい

う特化したテーマからでも、保育全般という普遍的課題への考察につながっていくものと考え。さらに、個人的な学びを園全体で共有しようとする姿勢も、本研修の成果と考える。

なお、以前の研修では、実技ワークショップと映像を使ったレクチャーの順番を逆にしたこともあったが、ここ数年の研修では可能な限り実技を先に行い、レクチャーを後にしている。そのことにより、レクチャーでの冗長になりがちな説明的解説が不要となり、話しを聞く保育者の反応も良い。可能な限りこの構成は踏襲したい。また実技ワークショップがなくレクチャーのみの研修会も少なからずある。そのため今後は砂場遊びの実技のポイント（木鋸や穴あきパケツの使用法と代替物による工夫及び簡単なサンドアート制作物）を視覚的に伝えることのできる映像も工夫したい。

⑤には重要な指摘がある。まず2年保育という対象者の環境に合致する内容の再構成が求められる。職場にはいない低年齢の子どもの様子を知ることは意義あることであるが、そこに関わっていない場合の保育課題を適切に伝えることは、筆者にとっても今後の検討課題である。もう一つは映像環境への配慮であり、機器等の設備の限界はあるにせよ、見え方の確認や座席配置等についてはもっと注意すべきことであった。いずれも研修改善の大きな要素として受け止めたい。

表6 午後のレクチャー（DVD／講話）についての感想（未記入者0人、全延べ回答数150件）

<p>①映像によるわかりやすさ、理解の深まり (94)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・DVDに沿って説明していただいたので、実際の子どもの姿と照らし合わせ、振り返りながら聞くことができ、より具体的に知ることができました。砂場遊びから様々な子どもの読み取りができること、色々なことが育っていることを初めて知りました。今まではほんやりと援助していた部分や、わかっていた部分を知れてとても興味深かったです。</li> <li>・砂はそれぞれの発達段階に応じた遊びができることを学びました。異年齢児の交流にもなり、人間関係の基礎となると感じました。</li> <li>・砂場遊びで子どもの育ちをどう見るか、映像をもとに子どもの姿を見ながらのご指導、大変分かりやすかったです。興味・関心の移行や操作の向上との関係も勉強になりました。砂場遊びがマンネリ化する時期、育ちの理由があることと、その時期の援助も大変参考になりました。育ちを読み取り環境を整えることの大切さを改めて学びました。</li> <li>・自分が保育をしていると見えない部分、見落としている部分があるがDVDを通してみる事ができた。</li> <li>・幼稚園にはいない0～3歳児の砂遊びの様子をみる事ができた。</li> </ul>
-------------------------------------	---

②砂遊びの楽しさ、意義などへの新しい発見 (20)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂場での遊びがこんなに楽しいものだったと改めて感じた。</li> <li>・いつも何気なく見ていた子どもと砂遊びの関係が、少し視点を変えるだけで子どもの育ちに大きく関係しているのだとわかりました。</li> <li>・ただの砂遊びと思っていたのが一変した。発達段階に合わせて遊ぶと言う見方が変わった。知らなかったことを知るの楽しいです。あつという間でした。これからの保育に役立てていきたいです。</li> <li>・砂遊び…それで何を育てたいのか、それをしっかり踏まえることで単なる砂での遊びではなく、教材であり、友達と関わる道具、様々なことができる遊びだと再確認できました。</li> <li>・砂との関わりの中で、多様な面の発達が期待できることがよくわかりました。特に砂遊びの発達の局面についてわかりやすく解説していただき、ただ遊ぶだけでなく、どのようなことを経験させたいのかという指標として参考にさせていただきたいと思います。</li> </ul>
③砂場遊びに対する指導法や環境整備への関心 (15)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・砂が心の安定にもなるということで、今後、大切な場所にしてあげたいです。実際に我が園でも子どもたちのドラマがあるのですが、その場限りでなく見てあげようと思います。</li> <li>・年齢別の砂遊びの楽しみ方が子どもたちの記録からわかり、保育者としてのかかわり方も勉強になった。その時の心の動きを見とれるような保育者となっていきたい。</li> <li>・保育者の役割も改めて考えさせられた。</li> <li>・砂との関わり方がどのように始まっていくのかが知れてよかった。また砂だけでは、遊びが全く展開されないということがわかり砂遊びでの用具の大切さを知ることができた。</li> <li>・自園の砂場周辺環境を見直そうと思います。</li> </ul>
④今後の保育への期待や課題 (17)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今まで道を作ったり、どろだんごや、ままごとと型抜きなどの平面の遊びだけだったので立体的に作る楽しさを子どもたちに伝えたいと思いました。</li> <li>・砂遊びで子どもの発達につながるものがたくさんあることを学び、これからの砂遊びで子どもに対する見方や接し方が変わると思います。</li> <li>・園に戻り他の先生方に伝え、今日学んだことを活かした保育にしたい。</li> <li>・学んだことを子どもたちとやってみたい。</li> <li>・今後の保育に活かしたい。</li> </ul>
⑤その他 (4)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・午前中の部の砂遊びについて詳しく学ぶことができた。</li> <li>・保育園の事例から発達の連続性などを学べてよかったが、2年保育(幼稚園)の場合の砂遊びについても更に教えていただきたい。</li> <li>・ビデオがよく見えず残念だった。</li> </ul>

#### 4.5 全体の振り返りについて

同じく3段階の評価を行ったが、結果は次のとおりである。

- A. 大変よかった……66人
- B. よかった……55人
- C. ふつう……5人

\* 未記入 8人

これまでと違い、「大変よかった」の数値はほぼ回答者の半分である。本項目への記述回答は、表7のように「その他」を含めて大きく5つに分類したが、記述欄への未記入者が39名いた。これは、全体の振り返りの時間がほとんど確保できなかったことが理由として挙げられる。ただし、この結果は時間配分のみならず進め方にも問題があったと考える。本来ならば、午後の部のレクチャーの最初に、午前中に出された疑問点を全体で確認すべきであった。そのうえで、DVD視聴に入る、あるいは講話につ

なが等ができていれば、質問を出した側も、また筆者自身も、焦点化すべき問題を明確に意識した話のできたのではないかと考える。そのことにより参加者の受け止めや理解はより明快になるであろう。参加者自身に自分の疑問点をより明確に意識してもらうことで、その理解度と満足度は変わる。これは次回以降ぜひとも心掛けたい。

一方、全延べ回答数は107であるが、①及び②④の回答からみるならば8割に疑問が解決した、勉強になった、今後活かしていきたいといったことが書かれている。午前中のグループワークで各グループから出された疑問点に対して、DVD映像やその後の講話において関連する内容を語ったことで解決が図られたものと思われる。子どもへの対応の仕方や砂場環境整備の方法、砂場遊びの大切さ等についての理解は、保育者を今後の実践に対する思いに向

かわせることがよくわかる。

なお、その他の項目にある、「付箋を各グループに置く」という方法は今後実施したい。時間

がないからこそ、このような方法は、参加者のちょっとした気づきや思いをていねいに拾い上げる効果的な方法になるものと考える。

表 7 全体の振り返りについての感想（未記入者 39 人、全延べ回答数 107 件）

①わかりやすく勉強になった、参考にした（36）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの思いを尊重しながらも、保育者や大人が“楽しさ”を体いっぱい表すこと、乳幼児期から触れる経験ができる環境を整えることが大切だと改めて学びました。また、子どもの成長の姿を具体的に丁寧に伝えていくことで、保育・教育への理解をしていただくことが求められていると思いました。“子どもの成長”のためであることを保育者自身、研究等を繰り返し伝えていくのが大切だと思います。いくつになっても楽しめる！と今日参加して実感しました。</li> <li>・質問についてわかりやすくおはなししていただき勉強になりました。レジュメも今後活用したいと思います。</li> <li>・環境や年齢に応じて、様々学べ、知れました。</li> <li>・ポイントをつかんだ回答でしたので、納得しました。</li> </ul>
②疑問や課題の解決になった（32）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門的なことから身近なことまで、教師の立場から回答をいただき、早く実践して幼児の姿を見てみたいと思いました。</li> <li>・疑問に思っていたことを的確に知ることができてよかったです。</li> <li>・砂遊びに夢中になれる砂の性質、自園の砂場環境がどうなのか、現状・課題がたくさん見えてきた。分からなかったことが分かったことで少しずつですが砂遊びに様々なアイデアがわいてきそうです。</li> <li>・砂遊びを嫌がる子への対応をきけてとても良かった。</li> <li>・どんな砂がいいのか、管理の仕方はどうしたらいいのか、疑問に思っていたことを知ることができ良かったです。</li> </ul>
③もっと聞きたかったという要望（21）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・質問に答えていただきとても勉強になりました。もう少し長くお話を伺いたかったです。</li> <li>・もっと詳しく教えていただきたいかったです。</li> <li>・もっと時間があればよかった。</li> </ul>
④今後の実践に活かしていく（11）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・園に戻ったら今日教えていただいた環境をつくって砂遊びをしていけたらいいなと思います。</li> <li>・砂場環境の整備にきちんと目を向けていかなければいけないと思いました。</li> <li>・砂場遊びには五感を育てる大切な遊びであり、保育者の環境設定、遊びの提案も大切なことなので、今後はもっとより深く楽しめるような遊びの提案をしていきたいです。</li> <li>・砂場の整備等に気をつけて、子どもたちが良い環境の中で砂遊びを楽しめるようにしていきたい。</li> <li>・園に戻ったら砂場の砂を交換してもらえよう交渉したい。</li> </ul>
⑤その他（7）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・疑問点や課題は解決できなかったが、自園で職員同士で考えていきたいと思う。</li> <li>・今日の砂がほしいです。</li> <li>・スライドの資料がいただきたいかった。</li> <li>・付箋を各グループに置くともっと深い意見が出たと思う。</li> </ul>

## 5. まとめ及び今後の課題

### 5.1 研修全体の振り返り

本研修を振り返り、研修内容と構成においては概ね参加者の満足を得る結果が得られたと考える。ただ全体を通して「もっと聞きたかった」「もっと（砂場実技を）やりたかった」という回答も多い。一つには時間の問題があり、今後は可能な限りの時間確保が望まれる。

一方、限られた時間であるからこそプログラム全体の再構築が必要である。そのためには、前項で触れたように参加者が期待するものと筆者が特に伝えたいこととの再構成を行い、より

的を絞った事項から伝えていくことが必要と考える。特に保育者が研修前から抱えている研修への期待と普段感じている砂場保育への疑問や悩み等を研修冒頭において明確にし、研修の後半部にそれらの期待や悩みに十分応え、解決できたかどうかを具体的に確認したり、あるいは参加者同士で話し合う場面を設けるなどの工夫が求められる。限られた時間や状況だからといって、単純に情報量を減らすのではなく、内容と構成と方法を練り合わせていくプログラムが必要である。本研究の対象は、砂場ワークショップとグループワーク討議と講話といういわばフル装備の研修を対象としたが、実際には



講話のみの場合や実技のみの研修もある。それぞれにおいて、最低限伝えるべき、あるいは考えてほしい内容や、是非とも持ち帰ってほしいスキルは何かといった研修カリキュラムの柱とその構成要素の検討が必要と考える。

また本研修の感想からは、他の参加者（園）のことを知りたい、話し合いたいという要望が高いことが分かった。実際、屋内グループワークを通して、疑問や悩み等を共有したり、共感したりできたことが大きな満足につながっていたことに注目しておきたい。

砂場ワークショップについても振り返っておきたい。まず、砂場へのモデル砂像の設置は吉田(2006)が「研修プログラムの形態と進め方」として述べた①ひきつける（関心を喚起する段階）、②インパクトのある体験や情報の提供としての意義を持つ。1.3 mの高さの砂像が保育者の視覚的印象に大きな驚きを与え、ぜひ自分も挑戦したいという意欲を引き出した。ただし、強いインパクトは、到底自分にはできないという印象を与えることもある。「これならば私でもできる」といった達成イメージが持てるモデルの提示も併せて必要である。

道具類の準備については、木鋸と穴あきパケツの使用が砂場保育を大きく変える要因となるものであることから、時間との兼ね合いからも参加者が必ず経験できる十分な数を用意しておきたい。その一方で、ここに各園が普段から所有する一般的な道具類を用意しておくことも必要である。それらを用いて、固定的にとらえていた本来の機能以外の使い方を示すことで（木鋸の代用として階段制作を見せるなど）、保育者のものの見方が大きく変わる。先のモデル砂像の提示と一緒に、特別な物がない限り自園では実現できないという考えにならないような配慮が必要である。

ただし「砂」については基本的に「適切な砂」という特別な砂の確保が重要である。砂が規格に合っていないければ、本研修のような砂場保育はかなり困難である。その問題への気づきを引き出すうえでも「適切な砂」は必要である。多

くの保育者が、「適切な砂」への驚きを記し、また数名の保育者が、適切な砂による砂場環境の見直しを園長に伝える等の感想を記していたが、ぜひともその実現を期待したい。今後は、「適切な砂」への社会的認知が広がるよう、関係諸機関（教育委員会、児童福祉課等の担当部局）への情報提供と提言を行っていくことが課題である。

## 5.2 今後の課題

本研究の考察を踏まえ、砂場保育に関する保育者研修プログラムの内容と構成をより明確にすることが今後の課題となる。冒頭で述べたように、本研修は砂場保育をテーマとして保育者の「明日の保育（学びの即効性）」と「これからの保育（学びの持続性）」の充実を実現させることを目指すものであるが、次の諸点を基本的な柱及びその構成要素として確認しておきたい。

- ①学びへの喜びと楽しみを実感できるプログラム…基本的なサンドアートの技術、新たな道具類の活用法、一般的な道具類の意外な使用方法、手だけで行う砂場遊びの方法
  - ②さらなる試みや学びにつながるプログラム…「適切な砂」への認知、砂場環境整備の視点、砂場遊びの系統的・構造的把握
  - ③同僚や保護者との共同につながるプログラム…教育計画・全体的計画における砂場保育の位置づけ、指導計画及び実践、親子保育等の具体的事例、砂場保育による保幼小連携の可能性
  - ④自分の課題や学びによる変容を見つめることができるプログラム…砂場保育に関する研修の構造化と参加者による自身の学びの履歴の確認
  - ⑤研修実施者と参加者が一緒に作り上げるプログラム…参加者のニーズ及びシーズに沿った事項、研修体験者のその後の取り組みや変化、研修参加者との協同による研修
- ①から③については、主に本研究において触れてきたことであるが、特に①は「明日の保育

(学びの即効性)」につながるもので、スキルベース（行動様式）に係る内容となる。これに対して②と③は「これからの保育（学びの永続性）」につながっていくものであり、ナレッジベース（知識理解）に係る内容が基本となっている。それぞれの構成要素は、参加者の期待やニーズ、抱えている問題、保育経験等を考慮してそのバランスやウェイトを考えていくことが必要となる。また、本研究では研修の目的・目標の達成度合いについて研修参加者の感想記述をもとに平板な解釈的考察を行ったが、より客観的な評価法の検討が大きな課題である。

④及び⑤については、現在次のような試みを開始している。それは、砂場保育に関する研修の全体的構造を示すモデルの作成と、そのモデル上のどこに保育者は位置するのかわかる化する（保育者自身の課題に向かうメタ認知を高める）取り組みであるが、このことについてはまた稿を改めたい。

今日、幼児教育・保育界においては、新たな幼児教育の課題が提起され、保育者の専門性を高める研修のあり方もさまざまに模索されている。主体的で対話的な学びは、子どものみならず保育者にとっても重要であり、何よりもその達成こそが保育者の向こうに存在する子どもにつながっていくことを考えるならば、研修そのもののFDは喫緊の課題である。

## 6. 結びにかえて

本研究の対象は福島県において開催された研修会であった。福島県は周知のように、東日本大震災に伴う東京電力福島第一原子力発電所の事故により、一時期、一定地域において外遊びができない時期があった。この時、砂場遊びは真っ先に制限・禁止の対象となった。当時、筆者はある保育者から「子どもたちから『掘る』という言葉とその動作が完全に消えた」という言葉を聞いたが、永野（2015）は「改めて、子どもの育ちにとって必要なものは何かを保育士として考えさせられました」と回顧している。福島県ではその後砂場環境の取り戻しが始まっ

た。当初は、県外からの砂を搬入しているところが多かったが、次第に県内産出の安心・安全でしかも砂場に「適切な砂」による砂場保育が可能となり、現在に至っている。砂場が復活した時、ある保育者は「子どもに笑顔と落ち着きが戻った」ことを実感したという<sup>3)</sup>が、当たり前を一度失いかけたとき、その当たり前の大切さが再認識された。

実は砂場の急激な減少は、今、全国的な傾向となっている。これは特に公園の砂場に関する現象であるが、日本の児童公園（現在は「街区公園」と名称が変更）では、かつて9割以上存在していた砂場が5割を切っている<sup>4)</sup>。さらには、砂場はおろか幼児がただ普通に歩き回れるような屋外環境すら存在しない乳幼児施設さえ出現している。果たしてこれはどのような子ども観のもとに起こっていることなのだろうか。

このような状況からも、砂場を有している保育施設の存在はますます大きな意義を持つ。保育施設が地域における子育てのセンター的機能を果たすことが求められて久しいが、砂場はその有力な舞台となるものであり、現在の乳幼児保育の危機的ともいえる状況を押しとどめる砦的な存在であると考えている。

以上のような社会的状況を背景として、「明日の保育（学びの即効性）」と「これからの保育（学びの永続性）」をともに実現できるような研修プログラムを模索するところである。本研究を通して現職保育者の多くがこのような学びへの要求をもっていたことがわかったが、これは大変心強いことであった。保育者の期待に応え、専門的資質の向上につながる研修の実現を目指したい。

## 追記

本研究にあたっては、福島県教育委員会の協力を得たことを期して感謝申し上げます。また本研究は、2017年度同志社女子大学国内研究助成Bの助成をもって行ったものである。

## 注

- 1) 本稿における「保育者」とは、幼稚園教諭、保育所保育士、認定こども園保育教諭らを総称して用いる。広義にはおいては保護者、更には保健師、看護師など乳幼児の健康や福祉に携わる要員も含まれるが、本稿では、園庭環境を有する保育・教育施設において勤務するものという条件のもとで「保育者」とする。
- 2) 新宿スタジオ (2011)『乳幼児の砂遊び』、第1巻「砂遊びから見る子どもの発達」、第2巻「あいかの砂遊び - 5年11か月の記録 -」。第1巻は大勢の乳幼児を対象とし、第2巻は女児あいか一人に焦点を当てて記録したものである。本研修では、第1巻を用いて行った。
- 3) 2011年6月1日付『毎日新聞』、「室内砂場に園児の笑顔」と題して報じられた。
- 4) 国土交通省「報道発表資料：都市公園における遊具等の安全管理に関する調査の集計概要について」2015（平成27）年3月31日版（[http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10\\_hh\\_000187.html](http://www.mlit.go.jp/report/press/toshi10_hh_000187.html)）より、1998（平成10）年度及び2013（平成25）年度の「砂場」数と「街区公園」数による。なお、同様の統計は平成10年以前は取られていないが、1993年の都市公園法改正までは「児童公園（のちの街区公園）」への砂場の設置は義務付けられていた。

## 参考文献

石井光枝 (1990) 「幼稚園における砂遊びに関する一考察」『日本女子大学紀要』家政学部 37、17。

石井光枝 (2007) 「砂遊びにおける『繰り返す』行為についての断章 - 3歳児クラスの砂遊びの観察から -」『発達』110 (28)、ミネルヴァ書房、75-81。

小川圭子 (2018) 「専門性の向上を目指す保育者研修のあり方についての検討 - 障害児保育を中心に -」『四天王寺大学紀要』65、66。

小川清実 (2007) 「砂遊びの構造 - 出会いの種々相 -」『発達』110 (28)、ミネルヴァ書房、53-59。

笠間浩幸 (1993) 「屋外遊具施設の発展と保育思想 - 砂場の歴史を中心に -」『北海道教育大学紀要 (第1部C)』43 (2)、91-105。

笠間浩幸 (1998) 「屋外遊具施設の発展と保育思想 (2) - 明治期の保育思潮と〈砂場〉 -」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』49 (1)、91-103。

笠間浩幸 (1999a) 「屋外遊具施設の発展と保育思

想 (3) - アメリカにおける〈砂場〉の歴史 -」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』49 (2)、37-51。

笠間浩幸 (1999b) 「屋外遊具施設の発展と保育思想 (3) - ドイツに探る〈砂場〉の起源 -」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』50 (1)、61-76。

笠間浩幸 (2001) 『〈砂場〉と子ども』東洋館出版社。

笠間浩幸 (2007) 「サンドアートをとおして考える子どもの成長発達を支える環境」『保健の科学』49 (6)、392-7。

笠間浩幸 (2012) 「砂遊びの長期観察から見えてきた保育課題」『発達』132 (33)、ミネルヴァ書房、49-56。

笠間浩幸 (2014a) 「砂遊びに見る子どもの育ち」『子どもと発育発達』11 (4)、222-5。

笠間浩幸 (2014b) 「『福島インドア砂場サミット』開催報告 - 福島県から発信するインドア砂場の可能性と今後の課題 -」『現代社会フォーラム』10、同志社女子大学現代社会学会、21-37。

笠間浩幸 (2018) 「遊具『砂場』のソーシャル・イノベーション - 砂場への『適切な砂』の標準化の試み -」『同志社政策科学研究』20 (1)、115-129。

柏まり、田中亨胤 (2007) 「子どもの創造的遊びを支える教師の役割 - 砂場における教師と子どもの対話の分析を通して -」『幼年児童教育研究』19、11-21。

小谷宜路 (2013) 「幼児教育における『砂場』の教育的意義に関する研究 - 幼児の育ちを捉える視点と環境を構成する視点 -」『埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』12、45-52。

柴田直峰 (2005) 「幼児の遊びの共有過程の探索的検討 - プレイルームにおける砂遊び観察の可能性 -」『立命館人間科学研究』8、81-89。

永野美代子 (2015) 「新たな気持ちで親子とともに」『保育通信』722、公益社団法人全国私立保育園連盟、8-12。

中村孝博 (2012) 「砂遊びは楽しい - らいらつく幼稚園の砂遊びの変化と実践的考察 -」『発達』132 (33)、ミネルヴァ書房、57-59。

箕輪潤子 (2008) 「幼児の砂遊びの発達過程 - 遊びの構造と展開に注目して -」『発達科学研究教育センター紀要』22、141-149。

吉田美恵子 (2009) 「豊かな環境とかかわる中で育つ感性 - 砂遊びを通して -」『長崎短期大学研究

紀要』21、79-88。  
吉田新一郎（2006）『効果10倍の〈教える〉技術

- 授業から企業研修まで -』、PHP 研究所、  
147-151。